

家庭教育 の てびき



相模原市教育委員会

はじめに

- ①子育て真っただ中であって、「何をどうしつければいいのか分からない」と悩んでいる人が多くいます。この悩みを解決するには、子どもが起こした行動の意味をよく知り、冷静に対策を考えて行くことが基本です。親が頭にきて、感情的になるとうまくいきません。気長に構えましょう。
- ②小学生になる前後の子どもは、必要なことを一つ一つ教えていかなないと分かりません。ここが小さい子どもへのしつけの難しいところ です。一度に沢山の課題を抱え込んであれこれ悩まずに、「あせらずにしつけていこう」という気持ちで、一つずつできるようにしていきましょう。
- ③しつけには、今どんなことに気をつけたらいいか、なにが大切かなどを知る必要があります。年齢的に無理なことを押しつけないためにも、今の年齢を中心にして引き継がれる先の大切な目標をよく知っておきましょう。
- ④小学校入学を期に、人間の発達や子どもの成長の要点をよく理解していただく意味で、エリクソンの発達課題を取り上げました。ご参考になれば幸いです。



1 「発達課題」ということ

エリクソンという心理学者は、人間の一生を乳児期から成人後期まで8階層を設けてとらえ、連続的な**人生周期**として説明しました。**周期**とは「1回限りの人生を個人の責任で受け入れていく」という現実的な意味と、「個人は次々と後の時代に受け継がれていく」という継続的な意味とを合わせ持つ言葉です。

彼は**発達課題**を述べています。発達課題とは、私たちが発達と共に、精神的な健康を得て健全な人格を作っていくために必要な課題です。発達にはその年齢で達成することが望ましい課題と、それに対立をする**危機**とがありますが、次の段階へ移る重要な条件は危機を解決することです。それぞれの**発達課題と危機とのもつれ**がうまく解決したとき**人格的活力**が身に付いてきます。発達課題の達成、すなわち、各年齢に見られる危機の解決こそが、何よりも重要なことだと言えるでしょう。

◎エリクソンの発達課題の要点 (エリクソン編・自我同一性 小口忠彦編・人間の発達過程から)

階 層	年 齢	発達課題と危 機	人格的活力
①乳児期	0～1歳	基本的信頼 対 不信	希 望
②幼児前期	1～3歳	自律性 対 羞恥・疑惑	意 志
③幼児後期	3～6歳	自発性 対 罪悪感	目 的
④児童期	6～12歳	勤勉性 対 劣等感	能 力
⑤青年期	12～20歳	自我同一性 対 同一性拡散	忠 誠
⑥成人前期	20～30歳	親密性 対 孤独	愛
⑦成人中期	30～65歳	生殖性 対 停滞	世 話
⑧成人後期	65歳以上	自我統合性 対 絶望	知 恵

次に児童期の発達課題と危機の関係を述べますが、その前に関係する年齢の発達課題を見てみましょう。

・誕生～1歳の「乳児期」は、**基本的な信頼感**を身につけることが課題で、**不信感が強まるのが危機**です。

乳児は母親、あるいは母親に代わる人から暖かい世話を受けながら、家庭は安全で快い場所であることや、人は頼りになることなどを学んでいきます。このように母親（あるいは代理）から世話を受けることで、基本的信頼感を身に付けていきます。また、人格的活力の**希望**も育ってきます。希望とは人間の生きる強さで、生きることを生涯支えていく力となります。

反対に暖かい保護や世話を受けられずに、愛情に恵まれない場合があります。このような場合、乳児は親に頼ることができないので希望も弱まります。こうして不信感は育ってきます。

・1歳～3歳の「幼児前期」は、**自律性**を身に付けることが課題で、**危機は羞恥・疑惑**が強まることです。

この時期は物を握る、放す、イヤと言うなど**意志**が現れてきます。そして、意志的な行動を繰り返しながら、自律（気ままさを押さえて自分でする）と自立（自分の力で物事をやっていく）を身に付けていき、意志も強めていきます。

子どもの行動や「イヤ」と言うのを厳しく叱ると、子どもは恥を感じて「自分は親に愛されているのか」と疑惑を抱きます。そして自分らしく行動する意志も弱まります。





・3歳～6歳の「幼児後期」は、自発性を身に付けることが課題で、危機は罪悪感が強まることです。

この時期は好奇心が活発に働くので、遊びながら積極性や自発性を発達させていきます。また、自分がしようとしていることの結果が予測できるようになり、目的を達成するために集中力を手に入れていくようになります。



もし親が子どもの遊びをいたずらと見て止めさせると、子どもは「悪いことをしたのかしら」と罪の意識が強まります。また自発性も発達せず、指示された通りにしか行動しなくなり、目的も達成できなくなります。

こうして小学校へ入り、いよいよ児童期を迎えます。

◎児童期（6歳～12歳）

発達課題は勤勉性を身に付けることであり、危機は劣等感が強まることです。



勤勉性は、自分の仕事を完全にやり遂げようとする態度を言います。子どもは入学すると初めて教科の勉強が始まり、やりたくなくても、勉強をしっかりと学ぶことが期待されるようになります。このような親の期待や学校生活の中で、身を入れて勉強することを覚え、勤勉性を発達させていくようになります。



また勉強の結果の成績は、学校や家庭で評価され、子ども自身も友達と見比べながら自己評価をするようになります。こうして段々と勉強することと生活が結びついてきます。

いっぽう人間には劣等感があります。時にはこれが発奮する力にもなりますが、劣等感が強まり

劣等コンプレックスになると、私は何をしてもだめだ、といった無能感に陥り何もできなくなります。この危機を克服して勤勉性を獲得させるには、勉強だけでなく他の経験をさせながら自分にできることを発見して、「できた」という実感を味わってみることが大切です。

また、この段階の人格的活力の「能力」は、「私には私なりの力がある」という実感を得させることです。この実感が「やればできる」という自信につながります。このような能力は、劣等感との争いを克服することで得られるものとされています。

・児童期が過ぎると**青年期(12～20歳)**を迎えます。**発達課題は自我同一性**を得ることで、**危機は同一性の拡散**です。自我同一性というのは、「私は家族や仲間から認められている私という人間である」ことを実感できる自信です。これが自分らしさを形づくっていく土台になります。

同一性の拡散とは「今の私はどんな私か。将来何をしようとする私か」ということへの答えが分からず、自分を見失っている状態を言います。これは、青年期は生理的や精神的変化が激しく、発達上の大きな危機にあるという意味を含んでいます。青年期の不安を示している言葉といえるでしょう。人格的活力の**忠誠**は、自分が選んだことに忠実であろうとする態度で、自我同一性と同一性拡散との争いを越えて身に付くものとされています。

以上がエリクソンの説の概略です。これから先は小学校1年生にしぼって見ていくことにしましょう。



2 子どもの可能性を育てる

私たちの要求には、大きく分けて二種類のものがあります。

一つは「食べたい、休みたい、友達と遊びたい、人から認められたい」などと願う**発達の要求**。もう一つは「人に迷惑をかけない、マナーやエチケットを身に付けさせたい、勉強させたい」など回りが子どもに期待して求めている**社会的要求**です。これらの要求を見ると、親が望む「規則正しい生活」は社会的な要求といえます。

個人の発達の要求は、家庭や社会の中で経験(学習)をしながら発達していきます。いっぽう社会的要求も社会文化や価値観を反映しています。このように、二つの要求は共に身の回りの影響を受けながら成り立っています。

子どもの二つの要求には、親の考え方や態度が大変大きく影響しています。親が子どもの要求にどう答えるかは、子どもの可能性を育てる重要な鍵になると言えるでしょう。

①子どもの自発的な欲求を大切に

「勉強しなさい」は、子どもが自発的に課題と取り組めるようにという親の願いを込めた社会的要求です。しかし親の「良い成績をとって良い学校に進め」というのは、子どもの社会性や自発性を育てることにはなりません。それは社会的要求と違って、親の目先の利益にとらわれたエゴイズムだからです。

子どもの自発性を育てるには、好きなことをし



たい気持ち、即ち、「自分の能力や個性に合っていることをしたいという要求を認める」ことです。この要求は関心を自分の気持ちに向けるようになって、小学校高学年頃から増えて個人化していきます。このことが個性の誕生につながります。

子どもの将来の人生に大切なのは、個性に合ったことを自発的に続けることです。子どもにこの気持ち（要求）を育てていくことが、可能性の発見を助け、育てることになります。

②大切な親の学習

親の社会的要求は、知らず知らずのうちに社会の価値観を反映しています。この意味で、親は社会的価値の代弁者といえるでしょう。親子の会話は、親が社会的価値の代弁者として、子どもの要求を受け入れたり注意したりする行為といえます。従って、親子の会話の調和は、親の社会的要求と子どもの発達の要求との調和から生まれます。そのために子育てには、親自身が自分の要求を社会的な立場から発達させるように、見直していくことが必要と言えましょう。

③良いか、悪いか二つの要求の争い解決

好きなことをしたいという要求は、好き勝手をすることに発展しやすいものです。これは特に子どもによく見られる行為です。

好き勝手なことをしてはいけない理由をよく聞かせて、社会にも認められる方法で実現させるようにしましょう。自分の希望することが、社会で許されるかが分かるようにすることが重要です。



3 家庭教育の働き

家庭はもっとも身近な家族が生活を共にする場所です。この親子の生活体験こそ、家族の心をまとめる大切な鍵になります。そして生活体験がもたらす親密感から、「情緒安定の働き」と「人間を整った形にする働き（人間形成の働き）」がもたらされます。家族生活は子どもが育つだけでなく、子育てをする親の心が育つのも大きな特色です。

①大切な「愛されている」という実感

親密な家族関係から醸し出される暖かく明るい雰囲気が、子どもに「私は親から愛されている。私は家族から守られている。ここは私のうちだ」という実感を生みます。そして心の健康と関係のある情緒の安定を育てていきます。

「親から愛されている」実感は、良い親子関係づくりと子どもの心の成長にとって不可欠なことです。親から認められているという確信は、安心感と親への信頼感を培う基になります。そして「もし失敗しても受け入れてもらえる」という安心感から、積極的に活動できるようになります。

子育ての重要な目標は「心豊かな人間に育てる」ことです。この基になるのが、幼児期から小学生になる頃の「愛し認めて受け入れる」という子育て方針です。



② 親は人間らしい心を形づくるモデル

道端の花を折ろうとすると、「花が痛がっているから止めて」と言う子どもの心の働きは人間だけに見られるものです。同じように思いやる、命を大切にする、他に迷惑をかけない、物を大切にする、決まりを守る、不正を怒る、喜びを分け合う、他の不幸を悲しむ、なども人間だけが持つ心です。

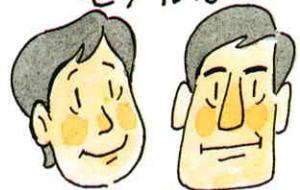
これらは主に情緒の働きですから、人間らしい心の土台は、人間らしい情緒の働きです。情緒は理屈で育つものではなく体験を通して育ちます。回りにいる人たちが、どんなことにどのような情緒の表し方をしているかがつよく影響します。父親・母親の何気ない日々の態度が、この重要なモデルになります。

子どもの情緒の働きは、親とよく似ていることがあります。もし親の情緒がいつも攻撃的であれば、子どもも友達に対して荒々しい態度で接するようになります。また、ちょっとしたことを悲しむ親の子は、悲観的な情緒を強めていくようになります。しかし情緒は固定したものでなく修正ができる可能性があり、自分の努力と家族の協力でのよい表し方に直すことができます。

喜怒哀楽はすべて情緒ですが、大切なことは「何を喜び、怒り、哀しみ、楽しむか」です。このモデルになるのは親です。親は安定した情緒の表現を行なう人として、社会的にも成熟した大人に成長することが求められています。この努力は簡単にはいきませんが、子どもに手本を見せる親としては大切な努力です。



モデルは…



4 しつけは習慣づくり

人間らしい人間に育てるために、また子どもの健全な成長を図るために、家庭でなければならない役割がしつけをすることです。

しつけは大きく分けて、次の二つに整理できます。

①自立に必要なしつけ

基本的な生活習慣のしつけと、健康や安全を自分で守るしつけがありますが、いずれも6歳から9歳頃までには身に付けておきたいものです。

「基本的な生活習慣のしつけ」は身业的自立の習慣づくりが大切です。この内容は睡眠・食事・登校などの時間を守る、衣服の着脱などが一人でできる、手伝いができるなどです。

「健康や安全を自分で守るしつけ」は朝晩の歯磨き、入浴、外から帰った時のうがい、手を洗うなど清潔の習慣、三度の食事をきちんとする、おやつ以外の間食をしない、早寝早起きなど健康の習慣、交通ルールを守る、知らない人に誘われてもついて行かない、外出は行き先を告げる、帰ったら親に報告するなど安全の習慣の三項目があり、これらを身に付けるようにします。

この例にあるように、しつけは簡単なものから徐々に難しいものへと進むので、思い付きではできません。しつけが成功するように、親がきちんと計画を立てておくことが大切です。

②社会的態度づくりに必要なしつけ

善悪のけじめをつける、約束や順番を守る、自



然環境や公共物を大切にするなど**社会的ふるまい方の習慣**、正しい挨拶や言葉づかい、乗り物の中での行為、清潔な身だしなみなど**社会的マナーの習慣**をつくるのが大切です。このしつけも、小学校時代にしっかりと身に付くようにしたいものです。

どんなことでも、子どもには強制的に教えるのではなく、自発的にできるようにすることが大切です。いっしょに目標をつくり、毎日一つずつ始めていきましょう。習慣となって身に付いた時、始めて自分のものになったことになります。しつけは正に習慣づくりです。

③習慣づくりの原理

・親への信頼感を培うこと

これが全てのスタートです。

・環境をしつらえること

子どもが興味を持つように場を整えることが大切です。たとえば、洗面台に子どもの手が届くように足場を作るとか、興味のある絵柄の専用タオルを与えるなどです。

・具体的に、段階的に教えること

子どものしつけは抽象的にやっても効果がありません。具体的に教え、段階的に行うのが効果的で大切です。そして簡単なことから難しいものへ、段階的に具体的なテーマと取り組ませることです。

また、しつけは良い習慣を身に付けさせることです。親子が一緒になって、できるまで何度も楽しく取り組むことが必要です。

・子どもに、できる目標を示すこと

習慣づくりは、子どもにも「できそうだ」ということから始めましょう。効果的な方法は、最初に「少し難しいけど、ちょっと努力すればできるかもしれない」と思うような課題から与えることです。

極端に難しすぎると途中で諦めてしまいます。また簡単すぎると飽きて止めてしまいます。

しつけは、今の実力に対し少し努力を要する課題が適当です。

終わりに

この「家庭教育の手引き」は、小学校に入学したお子さんをもつ保護者を対象に作成したものです。お子さんへのしつけがうまくいくようにと、願う気持ちでまとめました。

6歳頃を中心にして、今の大切な課題やこれから先の課題などから、項目を整理して取り上げてみました。中には「ここで取り上げたことは経験済みのことだ」という方もいるかも知れません。しかし、それが完全に習慣化しているのかをみると、残念ながら不十分なものが多いように思えます。

1年生頃は社会関係がうまくいくことと、人間関係を整えるしつけが中心になると思います。ここで扱った課題は1年生の基礎になると考えられるものです。まだ不十分ですが、お子さんが多くのことを学び、将来、社会人として立派に成長されることを願っています。





市章

「サガミハラ」の文字を図案化したものです。
市民が互いに手を取り合って、明るくなご
やかに進む姿、明るい相模原市を象徴する
ものです。

(昭和24年11月1日制定)

平成12年3月 発行
平成15年3月 第4刷
家庭教育のてびき
監修／I.C.E教育研究所長 浜田三雄、
編集／相模原市教育委員会
イラスト／市村 章
発行／相模原市教育委員会



古紙配合率50%再生紙を使用しています